

西日本新聞 2014(平成26)年11月8日(土)

画家・岡田三郎助の女性像の世界

佐賀県立美術館

学芸員 野中耕介

襟元の品格

美術館を訪れたお客様から、よく「絵は難しい」という言葉を聞く。確かに、世の中には一見何が描かれているのかわからないような「難しい絵」がたくさんある。芸術は社会を映す鏡でもあるから、世の動きを反映した複雑な内容のものが生まれてくるのは当然で、そこが面白さでもあるのだが、一方で、時代の変化にかかわらず、今なお誰もがその美しさに素直に感動できる絵も多い。岡田三郎助の作品は、そうした「目と

心に優しい絵」の筆頭ではなからうか。それらは写実的な画風だからということもあろう。加えて岡田の絵にはすべて、匂い



岡田三郎助「あやめの衣」1927年、ポーラ美術館蔵

文化

ファクス 092(711)6243
メール bunka@nishinippon.co.jp

た。彼が集めた着物や裂は膨大な数にのぼり、それらの中には実際に女性のモデルが身にまとい、絵に描かれたものも少なくない。ここにあげた作品「来信」や「あやめの衣」などは、作品とともに描かれた着物も残されている。

画家・中沢弘光は岡田の女性像の魅力を評して「岡田の女性像は、美人に例へて見ると、正面の笑顔でなく、襟もとから其横顔を覗きこむといふ様な処」(坂井厚水「現今の大家」)

岡田三郎助「美術新報」第10巻第6号、1911年)にあると語っている。また岡田自身、

「画といふものは難しく理屈を考え出すと限りがない。ただ、自分の思っていることが画を見る相手に解るかどうかというだけのことである」(清水良雄「人及び指導者としての岡田先生」『画人岡田三郎助』春鳥会、1942年)。

岡田が伝えなかったものは何か。彼にとっての理想の絵とは、大仰な主義主張を声高に訴えるようなものではなく、見る者にとつて、いつまでもその美しさに酔いしれていたかと思わせる「甘美な夢」のようなものであったのではないだろうか。

(のなか・こうすけ)



岡田三郎助「来信」1928年

立つような独特の「品」が備わっている。この品格こそが、私たちが魅了する最大の理由ではないだろうか。

1869(明治2)年、佐賀藩士の三男として生まれた岡田三郎助は、幼時に油絵に触れ、19歳で画家を志した。彼が画家として生きた時代―明治から昭和の初め―は日本の洋画が黎明期を経て、本格的な発展と展開を迎えた時期である。その

常に最先端の位置にいたのであった。

岡田の名声を一躍高めたのは、美しい美人画―女性像―の数々だった。彼が本格的に女性像―そして裸婦―に取り組むのはフランス留学期からで、岡田作品の穏やかで柔らかな色感、かの地の師ラファエル・コランのそれを受け継いだものであった。帰国後はコランの教えを基本として、日本の伝統美を織り込みながら表現を洗練させていった。それは日本の近代、新しい時代の「日本の洋画」の在り方をも示すものであったといえるだろう。